

シェイクスピアの「聖域」を切り崩す

Brian Vickers, *Shakespeare, Co-Author:**A Historical Study of Five Collaborative Plays*

境野 直樹

あるひとつの作者不詳の戯曲がある作家によって書かれたことを断定するためには、膨大な書誌情報、上演記録や個人の日記、その他ありとあらゆる文字情報の記録をつぶさに検証するというのが従来の方法であった。16世紀後半から17世紀の最初の10年ほどの間に世に出たものだったりすると、ついシェイクスピアの関与を探りたくなるのは、この時代の文学を研究する人間の「性」のようなものかもしれない。欽定英訳聖書(1611)のソロモンの雅歌の一節にシェイクスピアが周到に自らの名の一部を潜ませたとする Anthony Burgess の *Shakespeare* におけるスリリングな一節を引き合いに出すまでもなく、シェイクスピアの未発掘の鉱脈への渴望に近い思いは、その伝記的情報の欠落もあって、沈静化するどころか、近年コンピュータによる文体解析の効率化などを背景として、ますます強いものとなってきている。

タイトルページに「シェイクスピア作」と印刷されているにもかかわらず、それが売れ行きを伸ばすための虚偽の広告だったりするから、古い版本については多角的かつ慎重な調査が必要である。そうした「シェイクスピア作」を騙った作品群を Apocrypha としてキャンノンから切り分ける作業が行われてきたいっぽうで、いわゆる ‘Doubtful Plays’、すなわち、かならずしも具体的にシェイクスピアの関与を明示する書誌情報はないけれども、作品に内在するさまざまな要素(文体、語彙、レトリック、作劇術上の手法など多岐にわたる)をてがかりに、シェイクスピア作、あるいは少なくとも部分的にシェイクスピアの筆が入っているのではないかとする主張も、18世紀以来いくつかの作品について、繰り返しなされてきた。

拙稿「再び作者の磁場へ」(『岩手大学英語教育論集』No.5, 77-88)で詳説したが、近年唐突に二編の詩(‘Shall I Die’ および ‘Funerall Elegie’)が、研究者の間ではとりあえずの基準テキストとして認知されている程のシェイクスピアの全集、すなわち Riverside 版、Oxford 版(および事実上同一の内容である Norton 版)に、文献学的根拠も文体的根拠も薄弱なままで収録されてしまうといったスキャンダルがあった。さらに作者不詳とされてきた戯曲 *Edward III* も、(少なくとも部分的には)シェイクスピア作と認定され、New Cambridge Shakespeare のシリーズの一冊となった。このうち二編の詩については、当初から多くの疑義、反論が巻き起こり、それぞれの詩をシェイクスピア作とした提唱者たちが自らの主張を撤回、あるいは説明責任を放

棄した顛末は、Brian Vickers, *'Counterfeiting' Shakespeare* (Cambridge UP, 2002)に詳しい。評者にとっていささか意外に思われたのは、同書において作者不詳の「エレジー」が、文体、個性的な比喩構造などを徹底的に吟味された結果、John Ford の作品と結論づけられたことであった。確かに、証拠をひとつひとつ積み上げてゆく説得力の高い議論ではある。作者をめぐる伝記的事実からの創作の状況（外在的証拠）と文体論的特徴（内在的証拠）が共に緻密に検証されてもいる。しかし、類似の方法で戯曲の作者を推測する研究については、さすがに慎重にならざるを得ないのだろうと思いつつ、そうした研究の難しさを検証する批判の書としての情報を期待しつつ本書を手にとって、心底驚かされた。前著 *Appropriating Shakespeare* (Yale UP, 1993)以来、一貫して最近の文学研究の「流行」の浅薄さへの批判を展開し、西欧の古典全般にわたる広範で深い知識に裏打ちされた慎重なスタンスをもつ、いわば「右翼の大重鎮」であるはずの Vickers が、Apocryphaの検証どころか、シェイクスピアのキャンノンとして動かす余地があるとは考えにくかった第一四つ折り本(First Folio)所収のいくつかの作品に共著者の手を確認しようとするラディカルな挑戦を、しかも高らかな勝利宣言と共に 展開している。本書の衝撃は、それゆえますます大きなものとなった。もし、本書の結論を受け入れるならば、シェイクスピアのキャンノンについて、我々は大幅な見直しを迫られることになる。本稿ではこの極めて重要な提言の理論的要点を紹介し、近世英国演劇研究における作者 作品の関係性を再吟味するための指標として確認したい。

Vickers はまずもって啓蒙の精神に燃えている。*Shakespeare: The Critical Heritage, 1693-1801*, 6vols.をはじめ、20世紀後半の批評、とりわけポストモダン狂想曲とでもいべき事態を憂慮しつつ、しかしその陣営の評価すべき本質をみきわめつつ安易な援用(横領)を戒めた *Appropriating Shakespeare: Contemporary Critical Quarrels*(1993)、またルネサンス期の文芸論アンソロジーとして出色の *English Renaissance Literary Criticism*(1999)、さらには Pat Rogers ed., *Oxford Illustrated English Literature*(1987)の第4章(17世紀)など、Vickers の仕事は総じてスケールの大きな、それでいて細部まで目配りのゆきとどいた力作揃いであるが、そこにはけっして新奇な着想、前代未聞の新見解が披露されることはない。むしろ逆なのであって、読者は近年の批評の狂騒の陰に追いやられた感のある地味な研究の有効性について、あらためて、鮮やかなかたちで思い知らされることになるのである。

もうひとつ、Vickers の真骨頂は古典詩の伝統までさかのぼる叙情詩、わけてもエレジーの系譜(Consolatio)の研究である。1995年来日の折、報告者が聴いた東北大学での講演もこの主題であったが、それはさながら眩暈を覚えるほど巨大な水面

下の質量に支えられた氷山の小さな頂を見るかのごとくであった。してみれば本書ならびに『*Counterfeiting Shakespeare*』という大著2冊(合計で1000ページを超える)の同年の出版は、その規模に圧倒されるとはいえ、著者のホームグラウンドでの本領発揮とみてよい。実際、その仕事の多くの部分はシェイクスピア受容史における「スキヤンダル」の点検と告発に割かれている。とりわけ現代の標準的な研究者、学生がとりあえず信頼して手に取るはずの権威ある(とされる)諸々の版本(の編者の「怠慢」、「欺瞞」)にたいする厳しい語調の批判は、フェアであるために細部にいたるまで手を抜かない著者の学風をしのばせ、傾聴にあたいすると思う。そしてそれらの情報は、editorshipのバイアスの解毒剤として、わたしたちにとって必要なものである。

本書で共作とされるシェイクスピア作品および推定される共同執筆者は、以下のとおり。

Titus Andronicus, with George Peele

Timon of Athens, with Thomas Middleton

Pericles, with George Wilkins

Henry VIII, and *The Two Noble Kinsmen*, with John Fletcher

1*Henry VI, Edward III* については、現時点で共同執筆者の候補が「絞り込めていない」という理由で論じられない。(前者については最近の計算機解析でクリストファー・マーロウの文体との近似が指摘され、後者は共作者不詳のままシェイクスピアの作品と認定された。) Vickers にとって「絞り込めた」という判断の根拠は、シェイクスピア受容史を遠くさかのぼることのできる、繰り返し指摘されてきた可能性、いわば *critical heritage* なのであって、たとえば近年の計算機解析による研究成果など、降って湧いたような話は相手にしない。(ただし、ここで取り上げられているケースについて、コンピュータを用いた分析方法で「追試」を行うことは、ためらわない。) だが、評者としては *Edward III* についての徹底的な検証に関心がある。この瞬間にも検証が進行中なのであろうと思われる。さて、この“critical heritage”だが、具体的には19世紀の偉業、すなわち Charles Lamb, Henry Weber, Charles Knight, Samuel Hickson, James Spedding, F.G. Fleay などの仕事を指す。彼らは直感的に、*feminine endings*, *enjambement* などをシェイクスピアの文体の特徴としてとらえていた。これに加えて、これまで一般のシェイクスピア研究者たちには注目されることもなく、ほぼ忘れ去られたに等しかった1960年の Ants Oras (1960), Marina Tarlinskaja (1987) らによる韻律、ポーズなどの研究の再評価も、本書の重要な成果と

言える。また、いわゆる verbal parallels の研究も本書では再評価される。(この手法については、偶然の一致や常套句の援用にすぎないケースもあるので、一概には評価できないが、それでも Fletcher, Middleton についてはめざましい成果が報告されている。E.H.C. Oliphant, R.H. Barker, Cyrus Hoy, David J. Lake, MacDonald P. Jackson らの仕事を参照)。以上に加えて計算機解析を含む統計処理の援用。(Vickers は先行研究の追試、検証の道具として、つまり主として affirmative なデータが得られるケースについて、これを評価する。ある作家、作品について有効な分析方法が、すべての作家、作品について妥当するとは考えていない。)本書の前半部はこうした多様な方法論について、可能性と限界を見極めつつ紹介するパートとなっており、後半部では個々の作品についての具体的な検証となっている。紙面の都合もあるのでここでは前半部の二つの章、すなわち理論編についてやや詳細に紹介しよう。

Chapter I Authorship in English Renaissance Drama

一言で言えば、この章のトピックは External evidences の吟味。すなわち First Folio に収録されているからと言って、シェイクスピアの単独作とは限らないということの確認である。一般にこの時代、版本のタイトルページでの作者の名前の有無は、作者についての決定的な証拠とはならない。しかし *First Folio* の存在がこの事情を見えにくくした。Heminge & Condell とて知り得なかったコラボレーションの実態があったのかもしれない。彼等にとって共作であることが明白だった *Pericles, Two Noble Kinsmen* が F1 に入っていないのは、あるいはそういう事情?だが、*Henry VIII* は収録されており、単独作でないという理由で排除されたとは断言できない。*Cardenio* という lost play の存在も、ここで論じられる。いずれにせよ 1579-1642 で現存するのは 620、少なくとも 1500 程のタイトルが、存在したという記録にもかかわらず現存しないという状況をみれば、シェイクスピアの作品といえども、全集へのとりこぼしがあるかもしれない。さらにタイトルページにあって作者の名前は “an optional extra, and was often not divulged.(p. 10)” だった。その具体例として、*Sejanus* における Jonson の「共作者排除」(p. 26)などについても論じられる。現存するテキストが不完全である根拠を、テキストの外に、テキストの不在に探ろうとする困難さとスリリングな方法論の紹介は興味深い。

ではなにをもって “external evidence” とするか。著者が選ぶのは Henslowe's Diary, the Stationers' Register, the licensing records of Sir Henry Herbert、さらに現代の研究からは E. K. Chambers, *The Elizabethan Stage*, G.E. Bentley, *The Jacobean and Caroline Stage* におさめられた情報などである。

出版されたもののなかで単独作と共同執筆作品の割合についての表(p. 17)も有益

な情報である。D.A. Brooks (2000) の指摘によれば、1580-1604 で 868 single-authored, 138 co-authored plays さらに出版されたのはそのうち 497 single-authored, 32 co-authored で、コラボレーションは出版されにくい (残りにくい) ことが推測され、取り組むべき問題の困難さが知れる。(蛇足ながら、Harbage-Schoenbaum, *Annals of English Drama* の第3版 (S.S. Wagonheim ed., 1989) が不正確情報多数として脚注で批判されているが、こういう情報もきわめて有用。啓蒙書としての面目躍如というべきか。)

以上のことを前提に、Vickers はコラボレーションの実態を歴史的に再構成シミュレーションしてみようとする。Henslowe, 1597 December 3, では Jonson に原稿の手付け金支払いをしたものの、期日に間に合わず Chapman に鞍替えの記録がある。(Mr. Chapman on his play book and two acts of a tragedy on Benjamin's plot) p. 29. 以下、plot だけで売買されたと推測される芝居のケースや、締め切りに追われつつ金策、普請する作家の手紙など興味深い資料の提示。推測されるのは、期日に追われ、生計をたてるためにコラボレーションにはしる作家たちの姿である。得意分野別に (たとえば悲劇的な部分と喜劇的な部分で) 書き分けるということも、あるいはあったのかもしれないが、単純に前半/後半だったりもしたのではないか。以上のことをふまえた上での章の後半、*Sir Thomas More* のコラボレーションの実態についての推測はじつに興味深い。ともあれ本章で顕在化することは、書かれた記録の行間に潜む事情、あるいは記録されることの無かったより多くの作品の成立・出版・上演の複雑な事情の存在である。かくして external evidence は作品と作家の同定の資料として、もはや万能とは言えなくなってくる。

Chapter 2 Identifying Co-Authors

ここでは 1920 年代の Oliphant による Beaumont & Fletcher のキャンノンについての作家割り当ての試みの再評価が行われる。二人の共作としてこんにち通用している作品群に Massinger, Field, Jonson, Middleton, Ford, Webster, Shirley, Shakespeare, Rowley, Tourneur らの筆の痕跡を嗅ぎ分けようとする意欲的な仕事であったことが紹介される。この Oliphant の野心を 30 年後に Cyrus Hoy (supervised by Fredson Bowers) が引き継ぐ。つい最近までこうした試みは、現存する個々の作家の作品集の「自明性」を信じて疑わない文学研究の主流からは、異端視されるか無視されるかのいずれかであったわけで、これらを再評価し、援用するところに本書における Vickers の大胆さが感じられる。しかもその「合理性」が緻密に、説得力豊かに論じられた結果みえてくるものは、現代のシェイクスピア作品の版本編纂がみずからの歴史のあやうさにたいしてまったくと言っていいほど無自覚であるさまに他ならないのだ。(Oliphant の後継者とも言える研究者たちの分析的な手法の成果としては 1970 年代、

Middleton のキャノンについて、ほぼ同時にしかし別の手法できわめて近似のデータが導かれた事例が紹介されている。David J. Lake と MacDonald P. Jackson によるものである。これにより *Revenger's Tragedy* については Middleton の文体の特徴が顕著であるとのデータが揃い、Cyril Turner を作者とする従前の説は今やほぼ完全に根拠を失った。)ともあれ F1 に所収というのは決定的な external evidence とはなり得ない可能性があり、テキスト内の「痕跡」としての internal evidence が、時には物理的に現存する「作者」の記名の欺瞞を暴く可能性を持つことが次第に明らかになってくる。Vickers が注目するそうした internal evidence 解明の手法を、本書の構成に沿って列挙すると、以下ようになる。

• **verse tests:**

経験豊富な読者の記憶に依存した、特徴的文体の差異への着目。これはコンピュータにはできない「名人芸」。多分に主体的に墮する危険性もないとはいえない。

(F.G. Fleay は Dryden, *All for Love* を Fletcher, Beaumont, Massinger, Greene, & Rowley の韻律で書き直してみせたという逸話が紹介される!) その Fleay によれば、

Fletcher の特徴

1. Double or feminine ending が圧倒的に多い。

わざわざ行末に still, else, too など置いてまで、この効果にこだわっている。

2. stopped line (pauses at the end of the lines) の多さ

じつに 90% が punctuation で終わるライン。

3. (Beaumont と比べて) rhyme が少ない

4. 五歩格に届かないラインが多い

5. 散文を使わない

6. tri-syllabic feet が多い。scan しにくい

などであるという (p. 48)。

Massinger の特徴

F.L. Jones (1932) (p. 50-51) が、他の多くの作家が嫌った function word (light stressed) での行の終わりを気にしない特徴に気づいている。以下はその例。

Deform'd and crooked in the features of

Thy body, as the manners of thy mind

ただし Jones はこれを anonymous plays に適用して Massinger の影をさぐるという方法には使えないだろうとみずからの方法の限界を主張。Vickers もこれをうけて、

「作者同定の研究においてはとりわけ、既知の事実から始めなければならない」と強調している。これは *Edward III* について論じることに慎重な理由でもある。

Middleton の特徴

The Revenger's Tragedy: Middleton? feminine endings in Middleton and others
p. 52. TABLE 2.1 で *Revenger's Tragedy* の作者をミドルトンと推測するための担保は *Phoenix* と *Michaelmas Term* が確実にミドルトンの単独作であることだろう。もうひとつ、この二作のコントロールデータがそれぞれ 250 行、150 行というのも、気にならなくもない。とはいえ *Atheist's Tragedy* がここで仲間はずれなのは明かである。だから Cyril Tourneur が書いたものではないだろう。*Second Maiden's Tragedy* と *Revenger's Tragedy* の差を気にしなくて済むとすれば、それは *Phoenix*, *Michaelmas Term* が下支えをしているからということになる。

David Lake (1975) は 1608 年以前の喜劇作品と 1612 年以降の *tragi-comedies*, *tragedies* との間で文体の変化があるとの指摘を行っている。次第に韻を踏まなくなりそれにつれて *feminine ending* が 25% から 45% に上昇するというのだ。これは *Revenger's Tragedy* と *Second Maiden's Tragedy* の間の差を説明する。ちなみに *Atheist's Tragedy* は 1611 ということになっているから、この作品だけが仲間はずれになることは理解できるだろう。

もうひとつのミドルトンの癖は *rhyme* にこだわるあまりか *prose*, *verse* ごたませになってしまう文体 (Jackson 1979) だが、これは *Timon of Athens* に見られる特徴と重なる。

・作家の指紋：言語学的証拠 (linguistic > literary evidence)

以上はいわゆる作家の (おそらくはかなり自覚的な) 特徴の発露といえ、読者/観客にも意識されやすい、いわゆる「～節」的な要素であった。これとは異なり、いわゆる書き手の無意識の特徴 (いわば「指紋」) をさぐるのが、*stylometry* と呼ばれる文体解析の手法である。代表的なものが *Ant Oras, Pause Patterns in Elizabethan and Jacobean Drama* (1960) である。詩行の途中、*pause* のくる音節 (*meter*) のピークをグラフ化すると、作家ごとに特徴的な形状になるという興味深い労作である。

Oras のデータと *Oxford Textual Companion* によるシェイクスピア劇の創作年代との相関を SPSS (Statistical Package for the Social Science) を用いて計算機解析した MacDonald P. Jackson (*LLC*, vol. 17, No. 1, 2002) によれば、同一の作家についてみても、時期的に近い作品は相互に文体も似る、逆に時期的に離れると、(たとえば *1 Henry VI* と *Henry VIII* は 0.3862) 相関がぐっと下がることが示されるという。(TABLE 2.2 p. 56) *Oras* に並んで先駆的だったのが、*iambic pentemeter* に徹底的にこだわった

Marina Tarlinskaja (1987)。Jackson の指摘とも呼応するが、Shakespeare の文体は初期は rigid で後期に向かうと looser verse form になってゆくという。

• Parallel Passages

David Lake (1975)によれば、複数のテキストに共通の、特徴的な言い回しは、それらが同一の作者によって書かれたかもしれないことの有力な証拠となりうる。ただしここで注意すべきは、parallel passages があるという理由だけでは同一の作者であると推論できないことだ。これはあくまでも他の要素の補強というかたちで考察されるべきものである(negative check の必要性)。実例は Vickers 63-64 ページにかけての *Revenger's Tragedy* と *A Mad World, My Masters* の比較。台詞と状況ともにパレルの好例。しかも negative check が利いているから、証拠としてはきわめて有効と考えられる。

Parallel passages を考察する場合の留意点は Muriel St Clare Byrne(1932)によれば、1.parallels が起こる3つの可能性：

- a. unsuspected identity of authorship
- b. plagiarism, either deliberate or unconscious,
- c. coincidence

2. Quality is all-important, mere verbal parallelism is of almost no value in comparison with parallelism of thought coupled with some verbal parallelism;

3. mere accumulation of ungraded parallels does not prove anything;

4. we may logically proceed from the known to the collaborate, or from the known to the anonymous play, but not from the collaborate to the anonymous

5. in order to express ourselves as certain of attributions we must prove exhaustively that we cannot parallel words, images, and phrases as a body from other acknowledged plays of the period; in other words, the negative check must always be applied.

(that is, negative check, in order to show that 'words, images, and phrases' occur throughout the work of one author but not in that of his contemporaries.)

(cited, Vickers, 58)

近年注目されている Chadwyck-Healey LION (演劇データベース CD or online) は negative check が一発でできる点で、attribution study について、特にこういった verbal parallel 探しにはきわめて有効である。

• Vocabulary

英語の成り立ちゆえの特質 Anglo-Saxon (Germanic: tend to be mono-syllabled)と Latinate (Romance: polysyllabic)の併存。ただし教養のある作家、都市生活者/出身者は Latinate words を多様する傾向がある。(たとえば Dekker < Webster < Ford. これが

collaboration に反映する。同一登場人物が場面によって Latinate words の使用率が変わること、分担についての手がかりが得られる。使用率の求め方：たとえば、ある場の総単語数を多音節語の数で割る。）

ちなみに多音節語(four or five)をキーに Shakespeare を分析すると、*A Funeral Elegy*(1612)は突出していてキャンソンの溶け込めない。

ただし、*vocabulary* ということに関しては、ジャンル、人物、場の状況に影響を受けにくいという前提がないと、偏向が生じてしまう危険性はあるだろう。Jurgen Schafert(1973)によれば、リア王の台詞は場面によって、内容によって使用する Latinate words のパーセンテージが流動的であるという。これは台詞の内容、場面に語彙が影響される例であるが、こうしたテストは作者同定にはむしろ向かず、創作年代がすでにわかっている作品とつきあわせることで attribution をさぐるといった手法への応用が有効なように思われる。蛇足だが、たとえば Chapman のような、抽象的で哲学的、難解な台詞を少年俳優に喋らせる演劇というのは、非常に屈折した演劇的効果を持つのではないか。のちにみるように Fletcher のような recite しにくい台詞、必然的に個性をもったパワフルな台詞の間こえ方をするという舞台の状況について、興味をそそられる。

・ LINGUISTIC PREFERENCES

これは、*ye: you, has or does: hath or doth, whiles: while: whilst* などの使い分けや、縮約形使用の作家ごとの癖などに注目することである。Cyrus Hoy によれば Beaumont & Fletcher キャンソンのには 5,6 人の作家の手がかりが見いだせるし、MacDonald Jackson による Middleton の語法に見られる「好き嫌い」なども評価すべき重要な研究である。Shakespeare も 1600 年あたりをポイントに Dekker とともに spelling habits が変わるようにみえる。(Partridge 1964, Lake 1977)。Jackson 1978 によれば、*Sir Thomas More* の Hand D は 1600 年以降のシェイクスピア劇との類似を示すという。(p. 89)さらに G. Taylor によれば Shakespeare のキャンソンの *th* と *s* の区別によって、*As You Like It* までの 12 本と *Twelfth Night* 以降の 14 本に分類できるという。

・ FUNCTION WORDS

冠詞、接続詞、前置詞、代名詞、助動詞など、コンコーダンスでは無視されがちな語も手がかりとなることがある。上述のように、Jackson の chi-square test を用いた考察では *The Revenger's Tragedy* とミドルトンのキャンソンの近接と、*The Atheist's Tragedy* のほど遠さがデータとして出た。positive/negative 双方の discrimination に使える有効性を示すが、どの機能語がマーカーとして信頼できるかについての判断(これが肝心なわけだが)は、実際のテキストの読みを通じて察知されなければならない。(この意味で、言語学的特徴をキーとする研究は作家の指紋、無意識を探る精神

科医師としての研究者が、文体の個性に関する卓越した感受性を備えなければならないことを要求している。思いつきではなく、先行研究の蓄積の上にか成り立ち得ない所以である。)

・ STATISTICS and STYLOMETRY

言語学的な手がかりをさぐるテストをいくらしても、肝心なのは、それが作家の文体や、コラボレーションのなかで、どういう意味を持つかということが説明できること。これなしでは無意味である。そして統計処理は必然的に解釈である。

つまり、stylometry のかかえる困難さというのは、

- ・それが、何を解明する手がかりとなるのか
- ・どうしてそうなるのか

という根拠を、ともすると見失いがちになるということである。Andrew Q. Morton の、統計学をそれぞれ *mis-appropriate* した目を覆いたくなるような研究を Jonathan Bate が引用し、*Titus* がシェイクスピアひとりの作品であると Arden III 版の同作品の序文で書いているが、Vickers の本書での指摘を受け、Bate は自らの誤りを認めている。つまり、シェイクスピアの芝居に他の作者の筆が介入しているという古くは少数派・異端とされた見解は、今や着実に説得力を伴って、キャンソンの見直しの動きを推進しているのだ。

・ LANGUAGE CHANGE AND SOCIAL CLASS

これは一例を挙げれば中世の英国におけるラテン語とアングロ・サクソン語の関係のように、言語の展開、進歩は教養ある階層からはじまるという仮説に基づいている。(Socio-historical linguistics) たとえば Jonathan Hope (1994)によれば、ある作家の固有の言い回しはその創作活動全般を通じて大きな変化を被らない傾向があり、むしろ時間軸よりも(ただし、世代間ギャップはある)地域的特性、所属する社会階層に依存しがちであるという。街育ちの作家と田舎出身のシェイクスピアでは文体に違いがあるという事実に着目するわけだが、これに反してひとりの作家でも初期と後期では微妙に文体が変わるとする上述の Jackson (2002)との整合性が気になる。さらにシェイクスピアに関して注意すべき点としては、作家の語彙が *historical chronicle* に依存していてその影響を受けることも挙げられよう。たとえば *Holinshed* を引いたシェイクスピアの文体のバイアスを、わたしたちはどう考えればよいのだろうか。

・ DATING AND CHRONOLOGY

いわゆる *rare words* が共通に現れるいくつかの作品は、同時期に書かれた可能性があるとする仮説にもとづいて、作品の創作年代の近似を推測する研究もまた、Vickers は再評価する。たとえば、D. J. Lake (1977)によれば、*Sir Thomas More* におけ

る internal stop の頻度をみると、meter, rhythm, verse test の結果、feminine ending, alexandrines, broken ends など、1599-1606 のシェイクスピアに、すなわち *Hamlet* 以降の文体と近いという。だがもちろん、*More* の Hand D はデータとして小さすぎる。この手法で *Edward III* の創作年代を推測する E. Slater, *The Problem of 'The Reign of King Edward III': A Statistical Approach* (Cambridge, 1988)などは、再吟味する価値のある研究ということになる。

以上概観してきたように、記録として残されている external evidences を疑い、作品の分析によって得られた internal evidences を武器に近世初期の英国演劇全体のキャンノン再吟味・再構成しようとする試みは、近年の電子テキストの充実と計算機による解析手法の進歩によって、俄に魅力的な研究フィールドとなってきた。もちろん Vickers は、数世紀にわたる解釈史の伝統の延長線上のケースのみを取り上げる点で慎重なスタンスをもつようにも見える。しかし Jonson, Middleton, Heywood らをはじめとする、一定量の作品をもつ作家については、同様の手法の応用が可能ならずであり、本書で紹介された分析手法を多角的に援用することにより、作者不詳とされてきた作品の解明や、時には逆に、ある作家によって書かれたことがこれまで疑われなかった作品について、別の作家の筆致の存在を暴き出すといったことも、今後は可能になるはずである。英文学のキャンノンの再編成の問題は、こうして現代批評理論に裏付けられた受容者の価値観、モラルの問題にとどまらず、作者と作品の関係性の再吟味に向けても開かれているのだ。

(Oxford University Press, 2002, 558pp.)

(岩手大学教育学部英語教育講座)